

小さいのち 20 周年記念行事（最終回）「体験者が考えるグリーフケア」

プログラム

基調講演 田村恵子氏 京都大学大学院医学研究科教授

体験発表 会員による心に残る医療体験

会場との意見交換



基調講演 タイトルと概要 「愛する人を見送ること その先を生きること」

愛する人との別れは非常に衝撃的な出来事であり、自分の一部を失ったように感じることも少なくありません。こうした体験はグリーフと呼ばれ、遺された人であれば誰しも体験し得る正常な反応であると言われています。本講演では、このような人としての苦悩について理解を深めるとともに、遺された人がそれを機に何を学び、どう生きていくのかについて考えたいと思います。

発表 1 概要 誕生から旅立ちまで息子の人生は医療と共にありました。生きているうちに会えた人は医療スタッフがほぼすべて。先の見えない不安な将来を前に、1) 絶望的な状況の心境を理解してくれること、2) 精神的に追い詰められていく中で親の希望をくみ取りながら、できる限り要望に沿ってくれること、3) 反応できなくても息子を尊重し大切に対応してくれることに、喜び悲しんでいました。医療的ケア児の我が子と向き合った課題をお話いたします。

発表 2 概要 最終的に下された診断は EB ウイルス関連リンパ増殖性疾患でした。早い段階で専門病院へ転院させてもらえ、どの治療も先手を打ってしていただいたにもかかわらず、効果もなく旅立ってしまいました。命を守ることはできませんでしたが、治療、娘に対する先生方・コメディカルの方々の対応、また、家族のフォローや幼い姉が病状を理解するためのフォローに関して、感謝しかありません。娘や私たち家族にいただいたこととお話します。

発表 3 概要 娘を襲った病気は悪性リンパ腫でした。「85%治る」と言われていたにもかかわらず、15%の中に入ってしまった。最も過酷だったのは、再発が告げられたときでした。再発後は、一度も病院に行っていません。私どもが今、まだなんとか過ごしているのは、あの緩和ケアの時間があったからです。それぞれの医療スタッフが、娘と私たち家族にどのように関わってくださったか、その時どきに感じたこと、考えたことを振り返ります。

日 時 2020年3月15日（日）13:30～16:30 開場13:15

場 所 関西学院大学梅田キャンパス1004室（茶屋町アプローズタワー10階）

対 象 医療従事者、グリーフケアに関心のある人

定 員 80人（要予約）申し込み・問い合わせ 会代表 坂下裕子 s-ayumi@pop21.odn.ne.jp

参加費 小さいのち（子どもを亡くした家族の会）の運営への支援として

一口500円の寄付を3口（1500円）以上でお願いいたします。

主 催 こども遺族の会「小さいのち」 <http://www.chiisanainochi.org/>